

大学等名	関西学院大学
テーマ名	テーマ1：地域活性化への貢献
取組名称	学生による「劇場空間・宝塚」の都市再生
取組学部等	全学部
取組担当者	木本 圭一 / 学長補佐・商学部准教授
取組期間	平成16年度～平成18年度
Webサイト	http://www.kg-takarazuka.org/

取組の概要

宝塚歌劇を有する宝塚中心市街地は、都市再開発ビルの老朽化、テーマパークの閉園などにより急速に活力を失いつつあり、地域活性化が喫緊の課題である。本学は、平成15年度、学生提案による活性ビジョンと実現スキームを作成し、宝塚市と市民に提案し、市との間で都市再生に関する連携包括協定を締結した。平成16年度末には宝塚市に地域連携センターを設立し、地域プレイヤー（地域活性化に主体的に取り組む者）と協調しながら活性化に取り組む。これまで学生が教員とともに全体のプロモーター機能を果たしてきたが、今後、地域プレイヤーとして街づくり支援、高度福祉支援、新産業創造支援、宝塚歌劇・宝塚地域研究のプロジェクトを学生が主体になって推進する。さらに指導・評価体制を整備し、参画する学生に単位を与え、地域活性化や新規事業を立案・組織・推進できる人材を養成する教育システムとしてより有効なものとする。

実施の経緯・過程

<取組の実施状況>

取組の概要に記した実施方法により、平成16年度から平成18年度にかけて、学生、教職員、行政、地域産業、市民が一体となった活性化プロジェクトを実施した。

<教育課程・教育方法の工夫>

本取組の教育目的は、行政や地域プレイヤーに影響を与えるような学生による主体的な地域活性化の取組を通じて、「自ら課題を発見し、解決策を考案し、プロジェクトを組織し、他の組織と連携して課題解決を実践する起業家精神をもった人材」を養成することにある。

そのため、初年度は参加学生の活動は正規授業の位置付けではなかったが、上記の目的を達成するよう、教育指導を行った。その実績と検証を踏まえ、平成17年度から地域フィールドワーク（宝塚）（地域フィールドワークは以下、「地域FW」という。）を宝塚中心市街地に出てフィールドワークを中心に行う全学部生対象の全学科目として開講した。担当教員として、GP予算による研究員も新たに雇用し、教育の充実を図った。また2年続けて活動する学生を対象として、平成18年度に新たに地域FW（宝塚2）を開講し、地域FW（宝塚）の受講学生の指導的役割を担う活動を内容の中心とした。

<実施体制>

宝塚中心市街地にある阪急宝塚南口駅接続のビル2階に、関西学院大学宝塚地域連携センターを設置し、現代GP予算で雇用した職員を常駐させ、地域FWの授業および市民との交流の場所として活用した。また、現代GP予算で雇用した特別研究員の研究・教育活動拠点としても活用できるように工夫した。地域FWの担当教員として、全学から専任教員として5名、特別研究員として2名、非常勤講師として2名が指導にあたった。

<各年度毎の実施内容>

－平成16年度－

教育体制として翌年度以降、正規授業が開講できる体制作りおよび行政との連携を中核とした地域との連携体制作りを焦点として活動を進めた。宝塚市長・本学学長による地域プレイヤーへの呼びかけ、再生ビジョン検証準備会の開催、再生ビジョン検証ワーキングの開催を行い、再生ビジョンの内容を討議し、市民・産業・学生・教職員からの実施に向けての参加表明なども考慮にいて、実現の可否について宝塚市より考え方を表明することを行った。その上で、今後、具体的なアクションプラ

ンの作成や連携作成を行うとともに、実現可能なものから実践していく体制作りをすすめた。

—平成17年度—

平成16年度に宝塚に開設した関西学院大学地域連携センターを核に、すでに宝塚市主催の協議会において検証の終わっている6つのプロジェクトに新たなプロジェクトを加えて、アクションプランを作成し、目標管理方式に基づいた細かい教育指導を行った。

平成17年度は、各プロジェクトで少なくとも月に1回の産官民の連携先を交えた会合を開催し案を策定しプロジェクトを推進した。(カッコ内は推進学生数)。学生運営委員会(8)、足湯(4)、イルミネーション(3)、河川敷(1)、高度福祉(8)、地域／歌劇研究(8)、映像(3)、オープンカフェ(8)、フットサル(2)、韓国旅行ツアー企画(5)、宝塚名産品ネット販売(6)、フリーペーパー(5)、ふれ愛しっぷ in 宝塚(5)、フリーマーケット(6)。

—平成18年度—

平成18年度は平成17年度に続き、これまでの実施プロジェクトに新たなプロジェクトを加えて、アクションプランを作成し、担当教員8名によって目標管理方式に基づいた教育指導を行った。各プロジェクトでは少なくとも月に1回の産官民の連携先を交えた会合を開催し案を策定しプロジェクトを推進してきた(カッコ内は推進学生数)。学生運営委員会(9)、オープンカフェ(24)、新商品開発(6)、イルミネーション(2)、空き店舗テナント誘致(5)、足湯(10)、月地線活性化(8)、フットサル(2)、歴史街道(4)、フリーペーパー(3)、Movie make Workshop(4)、Web(1)、メディア(6)。

地域FW(宝塚)においては、新たに宝塚中心市街地の活性化策の創案・実施に参画する学生を募り担当教員を定め、そのフィールドワークの活動自体を教育プログラムとして進めてきた。この授業では、各受講生が下記実績①から⑦の取組に参画した上で単独あるいはプロジェクトチームを作って、それぞれのプロジェクトを本補助事業の目的のために推進した。地域FW(宝塚2)においては、平成17年度に開講された地域FW(宝塚)の既履修者を対象として、新たに当該科目を履修する学生にガイダンスを行い、各プロジェクト間のコーディネートおよび全体としてのプロジェクトをマネジメントし、広報活動や渉外活動を実践することにより、プロジェクト全体のさらなる発展を図りかつ受講生に対するさらなる教育効果を図った。地域FW(宝塚)および地域FW(宝塚2)の講義担当者は、それぞれ担当分野について出てきた課題に対する調査を継続的に進め、受講生がプロジェクトを進めるにあたって研究面からもサポート・指導した。また適宜、テーマに応じた適切な講演者を国内外から招き、効果的な事業推進を図ってきた。これらを通じて、選定取組をさらに充実・発展させ、本学の教育目的である「社会貢献への使命感を身につけた世界市民の育成」の機能の強化を図ることができた。

①フィンランド・バーサ大学での国際シンポジウムに協賛し、わが国における産官学民連携の事例として、本補助事業を中核とする宝塚市における取組を学生の代表が発表した。フィンランドは大学評価が世界のトップクラスであり、特にバーサ市はバーサ大学との連携を通じて、産官学民連携の拠点として数々のプロジェクトを推進し、成功事例に導いている。

②平成18年度は平成17年度末に策定されたアクションプランの具体的な実施についての協議を行い、学生の諸活動との調整を行った。

③本補助事業に関連する宝塚市での取組は、平成18年12月に内閣官房都市再生本部会議のヒアリングを受けている。フォーラム「大学と地域の連携協働による都市再生」では、都市再生本部から事務局長を講師として招いて実施した。

④9月のフォーラムを受け、10月・11月の社会実験の実施に向けて、その実施を効果的なものとするため、産官学民連携のためのワーキングを開催した。

⑤平成17年度社会実験として実施したプロジェクト(オープンカフェ、足湯、イルミネーション、フリーマーケット、エコマネー、ウォーキングホリデーなど)について、本年度は10月および11月に持続的実行が可能かどうかの観点から社会実験を実施した。

⑥10月および11月に実施した社会実験の各プロジェクトの分析・検証のため、産官学民の関係者が参加する協議会を開催し、社会実験の効果・問題点について検討した。同時に次年度実施に向け

ての新たな提案も募集した。

⑦地域 FW(宝塚)および地域 FW(宝塚2)の受講者が進めてきた宝塚中心市街地活性化に関する活動を客観的に見つめ、他の地域での取組について理解を深めるために、全国学生まちづくりフォーラムを2月17日に実施した。

＜実施の成果（平成18年度を中心に）＞

①地域 FW(宝塚)と地域 FW(宝塚2)の実施によって、学生の活性化策の策定・実施、それを踏まえたアクションプランの作成が可能となった。担当教員は個々の問題に対応して調査・研究を進め、学生のフィールドワークをさらに促進してきた。これらの授業によって単位取得できる、学生のモチベーションはあがり、策定したプロジェクトを効果的に推進できた。

②フィンランド・バーサ大学での国際シンポジウムに学生代表が報告することにより、当該学生がこれまでの策定案についての示唆を得ることはもちろん、バーサ大学との連携も図れ、本補助事業を効果的に推進することができた。さらに、発表に参加できなかった学生にとっても、自らが進めてきている取組が国際的にみてどのようなレベルにあるのかを知ることができた。

③宝塚市の市民に広く協議会に参加してもらうことによって、平成17年末に策定したアクションプランの実施に向け、連携して進める基盤ができた。学生の活動が単なる学生自身の考えにもとづく活動に留まらず、市民の目から見た新たな観点も得ることができた。

④内閣官房都市再生本部の第十次都市再生プロジェクトは「大学と地域の連携協働による都市再生」である。本取組がモデル的先進地域であるのかどうか、都市再生本部の担当者を招き直接意見を聞くことにより、学生が自らの取組がどのようなレベルにあるのかについて客観的に考えることができた。

⑤産官学民連携ワーキングを開催することにより、宝塚市あがての社会実験の準備を行い、社会実験をより効果的なものとすることができた。

⑥学生が策定してきたプロジェクトを社会実験として実施することにより、宝塚市にとって活性化の一助となるのかどうかについて客観的に測定できるとともに、今後そのプロジェクトを持続的に実行していくことが可能かどうかについても評価できた。

⑦実施した社会実験を、産官学民の関係者が参加する協議会(アドバイザー会議)において分析・検証した。当該社会実験の評価として、高い評価を得た。次年度へのアクションプラン策定の基礎データとしても、一定レベル以上のものが得られた。

目的に対する成果、人材養成面での達成度

各プロジェクトにおいて、目標管理手法を用いて、実施・評価を行ってきた。

各プロジェクトは年度始めにプロジェクト内容を議論し、実施計画を立てる際に、到達目標も同時に立てる。年度末にその目標に対してどれくらい達成したか、達成しなかったとしたら原因は何かという評価をまずが学生自身から、最終的には学生との面談を通じて教員によって評価を行う。

個々のプロジェクト数が多いため、個々のプロジェクト評価は省略するが、ボランティアな活動を含めれば3年間、授業としての活動としては2年間、それぞれのプロジェクトとしての成果は上がってきており、本取組み全体として、テーマ毎の政策課題に対する達成度は概ね良好といえる。

本プロジェクトに関わった学生は、本取組の教育目的である人材と概ねなっていくので、社会が求める人材として、就職状況も良好であるといえる。

自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

本取組は、本学において最初に採択された現代 GP であったとともに、私立大学であるにも関わらず地元自治体と中心市街地活性化に関する連携包括協定を全国に先駆けて進めた取組でもあった。また学生を中心市街地でフィールドワーク指導するという、本学では大学全体としての初めての試みであった。本取組の成果を評価し、本学では、他の近隣中心市街地の活性化をフィールドワークとする授業が続いて開講されている。地域 FW(伊丹)、地域 FW(西宮)などがそうである。

また本取組は、内閣官房都市再生本部の都市再生プロジェクト第十次決定の際に、地域活性化を学生

によって進める取組の先進大学として評価された。本取組を先進事例として、近隣大学では、地域活性化の活動を学生中心で行う、あるいは地元自治体と連携して進めるという事案が増えてきた。これも大きな効果であったと思われる。

学生等の評価

学生からの評価は非常に高い。座学では学べない、最近問題となっているいわゆる「社会人基礎力」の養成に有効な諸活動が本取組によって行え、学べるからであるというのが最も大きな理由であろう。学生はそれぞれのプロジェクトにおいて目標を設定し、その目標達成はどうであったかという観点から評価している。評価の例示を以下に列挙する。「 」内は目標である。

(学生運営委員会)「地域FW(宝塚)の授業内容の立案、実施および宝塚都市再生プロジェクトとしての方向性を検討し、今後の展開に寄与すること」←今年度は昨年度問題と感じたものを根本から変え、とにかく推進した。やればできるということを実感した。目標は達成できた。(オープンカフェ)「宝塚の街に活気を取り戻すため、中心市街地の河川敷にオープンカフェを出展することで市民やその他の方々の集える場所を提供すること」←アンケート結果から、市民に喜ばれたことは成功を意味し目標は達成できた。・あるひとつのことに実現するためには、大勢の人の努力があってはじめて実現できるということを実感した。社会人との接触も多かったので刺激も受けた。(イルミネーション)「宝塚の夜の賑わいを演出するため、イルミネーション行事への奉仕やブログ上で宝塚イルミネーションスポットを紹介すること」←全体として目標は達成できた。・何をしたらよいかわからなくなったときには、最初の目標を見つめなおして自分でできる範囲のことをするという点について実感をもって学んだ。(月地線活性化)「マンションと個人住宅と店舗が入り混じった月地線内のコミュニケーションの機会を作ること」←十分に達成できたとはいえ期待した以上に難しかった。・活性化には、まず住民の意識を高めることが必要であり、そこから多くの意見を出し審議していかなければならない。その補助的役割を果たす際に、その地域の歴史や環境についての知識を得てから、考え行動するという点の大切さを知った。(空き店舗テナント誘致)「空洞化が進む宝塚中心市街地に新しく店舗を誘致することによって街のイメージを一新させ、再生させること」←中心市街地の駅前周辺の現地調査を行い、空き店舗状況や街の様子を分析し地図にまとめた。どうすれば好条件な立地を生かせるかについて検討し提案を出したが、マッチングイベントや店舗誘致にまでは至らなかった。

学外からの評価

各年度、各プロジェクトに対して、市民および行政からの評価を受けている。各プロジェクトによって評価点の差はあるが、概ね高い評価を毎年度受けている。以下には、いくつかの個別のプロジェクト実施に対する評価を列挙する。

(オープンカフェ)・全般的にオープンカフェの存在は好評であった。・学生オリジナルメニューなどは好評であった。毎年、河川敷で開催してほしいという意見もあった。・提供メニューの質などについては好評であった。混雑したときは、対応の悪さを指摘された意見もあった。(イルミネーション)・ブログへの反応があり、プロジェクト実施の効果があつた。・年末以降、更新がないことへの苦言を受けた。(月地線活性化)・評価は高かった。実施イベントについても予想以上の反響があつた。(空き店舗テナント誘致)ポスターセッションなどの説明に対しては好印象の反応が得られた。

取組支援期間終了後の展開

平成19年度から来年度にかけて、他の諸団体と連携して、中心市街地の連携活動拠点の設置をを検討中である。平成19年度は、地域FW(宝塚)、地域FW(宝塚2)を継続して開講し、担当教員は専任教員1名、非常勤講師3名で担当している。平成20年度も同様に開講していく予定である。